

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25284148

研究課題名(和文)感情の共同体？ ドイツ近現代史への新たな視座

研究課題名(英文)Emotional Communities? - A New Perspective on Modern German History

研究代表者

森田 直子(Morita, Naoko)

立正大学・文学部・准教授

研究者番号：30452064

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,400,000円

研究成果の概要(和文)：近年、さまざまな領域で「感情(情動)」がキーワードとなっているが、歴史学もその例外ではない。とりわけアメリカ、ドイツ、イギリスを中心に「感情史(感情の歴史学)」という歴史研究のアプローチ方法が盛んとなっている。

本研究では、この「感情史」とはどのようなものなのか、過去にあったを不安や恐怖についての歴史研究と何が異なるのか、いかなる可能性を持つのか、といった点について、とくにドイツ近現代史の立場から積極的に議論をおこなった。

その結果、「感情史」の一般論的な可能性のみならず、そうしたアプローチによる日独の比較が、ドイツ近現代史に新たな展望をもたらすことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Not few historians in the US and Europe, especially Germany and Great Britain, are talking about "history of emotions" in the last decade. So we discussed it in many ways and concluded as following: the history of emotions is not only just interesting, but also has great potential for Modern German History and future historiography at all.

研究分野：ドイツ近代史

キーワード：感情史 ドイツ近現代史 日独比較

1. 研究開始当初の背景

近年、学問分野を問わず、「感情(情動)」をキーワードとする研究が盛んになっている。歴史学においても、過去の間、そしてその集合体としての社会が、感情をどのように制御、利用しようとし、逆に感情が個人や社会をどのように動かしてきたのか、という根本的な問いに取り組む動きが欧米を中心に活発化している。

もちろん、これまでも歴史学は「感情」というテーマの重要性を等閑視してきたわけではなく、例えば、アナル学派の影響を受けた研究、不安や恐怖といった個別の感情を扱う研究が存在する。しかし、近年の「感情史」への注目の高まりは、それらと直結するわけでもなさそうである。

そこで、近年の「感情史」研究について理解を深め、展望を見出すことを出発点とした。

2. 研究の目的

ドイツを中心とする欧米で行われている「感情史」の成果を摂取しながら、19世紀以降のドイツ近現代史を事例研究の場として、多角的な観点から分析、考察を進めることによって、そこで感情が果たした役割についての知見を深めるとともに、「不安の時代」ともいわれる現在の状況を歴史的に再検討するための視座を提供することを目的とする。

3. 研究の方法

「感情史」全般について科研メンバー全員で行う共同研究と、メンバーの個別研究の深化とを両輪とする。研究期間の前半は主に前者に重点を置き、感情史にかかわる重要な基本文献について議論・検討する。研究期間の半ば以降は、重点を後者にシフトし、各自が自らのテーマに沿って史料収集・分析を進めてきた結果を発表し合い、議論を重ねる。

4. 研究成果

個別研究の成果については、「5. 主な発表論文等」の項を参考されたい。共同研究としては、年度毎に以下の様な成果を積み重ね、最終的に(5)に挙げるような結果に至った。

(1)平成25年度は、ドイツにおける感情史研究の一大中心地であるベルリンのマックス・プランク人間形成研究所所長のウーテ・フレーヴェルト教授の最近の著書2冊(*Vergaengliche Gefuehle*, Goettingen 2013; *Gefuehlspolitik. Friedrich II. als Herr ueber die Herzen?*, Goettingen 2013)、同所研究員スヴェン・オリヴァー・ミュラーの『歴史と社会』誌所収の論文(*Die Politik des Schweigens. Veraenderungen im Publikumsverhalten in der Mitte des 19.*

Jahrhunderts, 2012)、また、感情史研究の牽引役をつとめているアメリカの研究 者ピーター・N・スターンズの初期の論文 (*Emotionology: Clarifying the History of Emotions and Emotional Standards*, 1985)ならびにバーバラ・ローゼンウェインの論文(*Problems and Methods in the History of Emotions*, 2010)、さらには、日本の事例として、兵藤裕己『声の国民国家』(講談社学術文庫, 2009)を取り上げ、批判的な検討を行うことで、そもそも感情史とは何かという根本的な問いについて多面的な見解を得ることができた。

また、ダグマー・エラブロック(マックス・プランク人間形成研究所研究員)を招聘し、彼女自身の関心とからめた感情史研究のあり方と、より一般的な感情史研究の動向についてドイツ語と英語で講演してもらい、ドイツ/ヨーロッパにおける感情史の最新の議論を摂取できた。研究分担者各人のテーマについても、彼女からの示唆に富むコメントを得ることができた。

(2)平成26年度は、日本語、英語、ドイツ語で発表された最近の研究文献(単著3冊、雑誌の特集号2冊)の検討を行うことで、引き続き「感情史研究」の新しい研究成果を摂取し、理解を深めることができた。それに加えて、マックス・プランク人間形成研究所の研究員であるスヴェン・オリヴァー・ミュラー博士を招聘し、2日間にわたるワークショップを行った。ミュラー氏による「19-20世紀の音楽生活における感情の歴史」というタイトルの講演(クラシック音楽の演奏会・聴衆の感情について)と討論を通じ、感情史の多様性、奥行きを具体的に学ぶことができた。また、研究分担者各人が行う感情史研究について、ミュラー氏とともに英語もしくはドイツ語で議論することで、個別研究の成果が出始めた。

(3)平成27年度は、研究会における重点を「感情史研究」の新しい成果の摂取から、研究分担者の個人研究の報告、批判的検討へとシフトさせた。当初からのメンバーである6人の研究分担者は、それぞれ以下のようなタイトルで報告し、ドイツ近現代史に関するテーマを「感情史」というパースペクティブで切り取る試みを行っていることを示した。「世紀転換期のドイツにおける学校教育と体罰」、「神聖ローマ帝国とフランス革命 帝国大宰相ダールベルクの帝国愛国主義について」、「19世紀ドイツ市民社会における市民参加と感情の役割」、「祭の近代 18世紀末・19世紀前半のプロイセンにおける民衆祭をめぐる政治」、「身体と感情の市民的自己抑制? 19世紀ドイツの「決闘試合」」、「「Gemuetlichkeit」と感情の政治 ナチ

体制におけるクリスマス」』さらに、ドイツ近現代史を相対化するために招き入れた日本近現代史の研究分担者は、「体験」と「気分」の共同体？ 戦間期の「聖地」ツーリズム」というタイトルで報告を行った。「感情史」という枠組で、ドイツ(および日本)の近現代史研究の新しい可能性の方向性が見えてきた。

(4)平成28年度は、前年度の成果を受け、ドイツ近現代の「感情史」を日本近現代史のそれと対比させつつ深化させることを目標の一つとし、気鋭の日本近代史研究者に「近代日本における「感情」の用法の一端 日清戦争前後を中心に」という報告をしてもらった。19世紀末から20世紀初頭にかけての日本で、「感情」という言葉がどのような文脈でいかように用いられていたのかについての極めて興味深い報告であり、とくに概念史という点でドイツ史研究(者)にとって大きな刺激が得られた。また、「感情」をキーワードとする近代日独文化交流史に関連する資料館・遺構の視察(久留米俘虜収容所関連施設(ドイツ兵俘虜慰霊碑)、北原白秋記念館)を行った。と同時に、欧米を中心に展開される「感情史」研究の意義や面白さを、日本の歴史家や読者層にも広くアピールする必要性を痛感したことから、ヤン・プランパー(ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ)が2012年にドイツ語で出版し、2015年に英訳されて影響力を持っている感情史の概説書『感情の歴史』を日本語に翻訳・出版することを企画した。

(5)平成29年度は、これまでの研究成果の集大成・公開を行った。具体的には、1)ドイツ現代史学会第40回大会を、2017年9月23日(土)・24日(日)の2日間にわたり、共立女子大学神田一ツ橋キャンパスにおいて開催。2)23日午後:ドイツから招聘した感情史研究の旗手ウーテ・フレーヴェルト教授(マクス・プランク人間形成研究所所長)による公開講演「屈辱の政治 近代史における恥と恥をかかせること」(英語)。3)24日午後:公開シンポジウム「感情史の射程 日独事例研究から」(本科研代表者・森田直子(司会・主旨説明)、分担者・小野寺拓也(報告「ナチ体制と「感情政治」 第二次大戦下のクリスマス为例に」)、分担者・平山昇(報告「体験」と「気分」の共同体 20世紀前半の伊勢神宮参拝ツーリズムを事例に」)。4)25日午前:フレーヴェルト教授と科研メンバーのワークショップ(ドイツ語):日本語で行った前日のシンポジウム報告およびコメントの紹介を交えつつ、感情史全般に関する自由かつ密度の濃い意見交換。

学会は2日間で80名以上が参加し、感

情史研究への関心の高さを伺えるとともに、その学術的魅力のアピールに寄与できた。公開シンポジウムでは、本科研の研究成果の一端が示され、外部から招いた3名の歴史家からも充実したコメントが得られた。総じて、感情史の可能性のみならず、感情史というアプローチ方法による日独の近現代史の実践例の提示を通じ、今後の研究への展望が明らかになった。なお、学会の場において、フレーヴェルト教授の講演およびシンポジウムの報告をそれぞれ原稿化し、まとめて雑誌に発表する話がまとまり、本科研費研究成果のさらなる社会的還元への道筋がつけられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計46件)

森田直子「感情史の現在 最新の入門書を手がかりに」(『思想』8月号、No.1132, 2018年、査読無し、頁未定)

小野寺拓也「ナチ体制と「感情政治」 第二次大戦下のクリスマス为例に」(『思想』8月号、No.1132, 2018年、査読無し、頁未定)

平山昇「「体験」と「気分」の共同体 20世紀前半の伊勢神宮・明治神宮参拝ツーリズム」(『思想』8月号、No.1132, 2018年、査読無し、頁未定)

森田直子「メディアにみる近代ドイツの「決闘試合」(中)」(『立正大学文学部論叢』第141号、2018年、査読無し、57-76頁)

森田直子「メディアにみる近代ドイツの「決闘試合」(上)」(『立正大学人文科学研究年報』第54号、2017年、査読無し、1-15頁)

辻英史、小野寺拓也「若者が「政治」に関わるとき」(『ドイツ研究』第51号、2017年、査読無し、3-9頁)

小野寺拓也「感情と情報リテラシーの狭間で 第二次大戦末期のドイツにおける噂とコミュニケーション」(『歴史科学』第226号、2016年、査読無し、15-27頁)

西山暁義「ドイツの『サンボ』: 帝政期ドイツにおける児童向け絵本と植民地主義」(『歴史と地理』第694号、2016年、査読無し、27-34頁)

森田直子「感情史を考える」(『史學雑誌』第125編第3号、2016年、査読有り、39-57頁)

平山昇「初詣をめぐる言説の生成と流通」(『商経論叢』56-11、2015年、査読有り、11-32頁)

今野元「マックス・ヴェーバーとカトリック世界—近代批判的ヴェーバー研究の歴史学的批判」(『政治思想研究』第14

号、2014年、査読有り、171-200頁)
辻英史「19世紀後半ドイツにおける「社会的なもの」の成立と発展」(『近現代史研究会会報』第84号、2014年、査読無し、1-15頁)

森田直子「近代ドイツの決闘試合 回想録を手がかりに」(『立正史学』第116号、2014年、査読無し、1-24頁)

西山暁義「ヨーロッパ国境地域における歴史意識と博物館 アルザス・モーゼル記念館の事例」(『共立女子大学総合文化研究所紀要』第20号、2014年、査読無し、83-121頁)

山根徹也「歴史への《問い》を考える 歴史学の方法と現在」(喜安朗・北原敦・岡本充弘・谷川稔編『歴史として、記憶として』『社会運動史』1970-1985』御茶の水書房、2013年、査読無し、286-298頁)

[学会発表](計 30 件)

小野寺拓也「ナチ体制と「感情政治」—第二次大戦下のクリスマス为例に」、ドイツ現代史学会第40回大会、2017年
平山昇「「体験」と「気分」の共同体 20世紀前半の伊勢神宮参拝ツーリズムを事例に」、ドイツ現代史学会第40回大会、2017年

森田直子趣旨説明:シンポジウム「感情史の射程 日独事例研究から」、ドイツ現代史学会第40回大会、2017年

小野寺拓也「感情と情報リテラシーの狭間で 噂・ニュース・エゴドキュメント」、第67回日本西洋史学会・小シンポジウム、2017年

西山暁義「暴力教育の世紀末から『子供の世紀』へ? 19世紀末ドイツの学校教育における体罰」、同志社大学人文科学研究so第19期「身体・環境史研究会」、2017年

森田直子「歴史学と感情」、第11回日本感情心理学会セミナー、2017年

今野元「帝国愛国主義の変容? 帝国大宰相 C. Th. v. ダールベルクのライン同盟参加を中心に」、中部ドイツ史研究会、2017年

小野寺拓也「モラル・感情という視点から見る「包摂」と「排除」 「Gemütlichkeit」とクリスマス」、ドイツ現代史学会第38回大会、2015年

西山暁義「ヨーロッパ国境地域の記憶の場: アルザス・モーゼル博物館を例に」、第65回日本西洋史学会・小シンポジウム、2015年

辻英史「ドイツ社会国家における名誉職・ボランティア制度」、第112回史学会大会西洋史部会、2014年

[図書](計 14 件)

辻英史、川越修『歴史のなかの社会国家

20世紀ドイツの経験』、山川出版社、2016年、352頁

平山昇『初詣の社会史 鉄道が生んだ娯楽とナショナリズム』、東京大学出版会、2015年、328頁

今野元『教皇ベネディクトゥス一六世「キリスト教的ヨーロッパ」の逆襲』、東京大学出版会、2014年、504頁

木村靖二、西山暁義、千葉敏之『ドイツ史研究入門』、山川出版社、2014年、488頁

[その他]

ウーテ・フレーフェルト著、森田直子監訳「屈辱の政治 近代史における恥と恥をかかせること」(『思想』8月号、No.1132、2018年、査読無し、頁未定)

ヤン・プランパー著、西山暁義訳「恐怖 20世紀初頭のロシア軍事心理学における兵士と感情」(『思想』8月号、No.1132、2018年、査読無し、頁未定)

マルティナ・ケッセル著、小野寺拓也、森田直子監訳「身体化された支配 ナチ期のカーニヴァル」(『現代史研究』第59号、2013年、査読無し、19-36頁)

6. 研究組織

(1)研究代表者

森田 直子 (MORITA, Naoko)
立正大学・文学部・准教授
研究者番号: 30452064

(2)研究分担者

小野寺 拓也 (ONODERA, Takuya)
昭和女子大学・人間文化学部・講師
研究者番号: 20708193

今野 元 (KONNO, Hajime)
愛知県立大学・外国語学部・教授
研究者番号: 60444949

辻 英史 (TSUJI, Hidetaka)
法政大学・人間環境学部・教授
研究者番号: 80422369

西山 暁義 (NISHIYAMA, Akiyoshi)
共立女子大学・国際学部・教授
研究者番号: 80348606

平山 昇 (HIRAYAMA, Noboru)
九州産業大学・商学部・准教授
研究者番号: 20708135
(平成26年度より研究分担者)

山根 徹也 (YAMANE, Tetsuya)
横浜市立大学・都市社会文化研究科・教授
研究者番号: 10315822